

第3章 惑星チターの異変

トナのホームシック

【もう帰りたいトナ・・・】

トナはエイミーの家の畑で夜空を見ながらつぶやきました。エイミーが今日アイムシュタイン所長のところにフレンズがいたことを話したことがきっかけでした。

『エイミー、なにかお歌でも歌ってくれるかしら』

「わたしのお歌でよかったら・・・。でもこの笛で吹くわね」

そう言ってエイミーはこっそりとフレンズのために作った歌を笛で吹き始めました。

【フレンズのころろ】

[1] ボクのことを知っていても いつもきみはしらんぷり

きみのことも きみのころろも いつも大切に守っている

いまなら いまから いっしょに 歌おう

ラララ

うたって うたって カラフルトナトン

はしって はしって 緑のレタチン

おどって おどって オレンジデコポ

ボクらはころろの フレンズだから



[2] きみはいつか遠いところ しらないまちへいくんだろう

ボクはいつも きみのことを どこかで大切に守っている

いまなら いまから いっしょに 歌おう

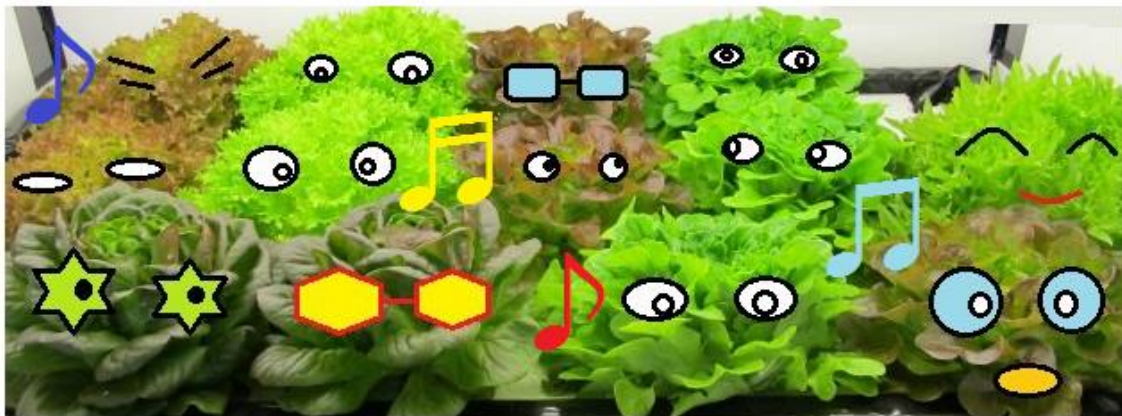
ラララ

うたって うたって カラフルトナトン

はしって はしって 緑のレタ

おどって おどって オレンジデコ

ボクらはこころの フレンズだから



『誰か一緒に歌っているの？とってもいいわよ』

『わたしよっ・・・』

『デコ、あんたは歌がうまいわね。練習したトナ？』

『エイミーが笛を練習するからって一緒に歌を作ったポン』

『そうね、デコ。とってもいいお歌だわ』

『誰？レタ？』

『ビエ〜〜ビエ〜〜ビエ〜〜〜』

レタはエイミー、トナ、デコの前で大声で泣いてしまいました。

『レタ、どうしたのよ』

『だってさ、エイミーの笛もとってもいいしさ、デコの歌もうまくてさ、オラッチ、レタ畑を思い出しちゃったのさ、ビエ〜〜〜』

『わ、わかったわ』

『ビエ〜〜ビエ〜〜ビエ〜〜〜』

『わかったからもう泣かないでちょうだい』

トナは静かにレタに言いました。

『それにしてもエイミー、ずいぶん笛がじょうずだわね』

『このお歌を作ってからすごくうまくなったポン』

デコの言葉にエイミーは頭をかきながら言いました。

「トナさんもデコさんもレタさんも、みんな元気を出してね。だってフレンズでしょ」

『そ、そうだニ。ありがとうニ、エイミー』

レタは、少し笑いながら言いました。

「でもちょっとはずかしいな」



エイミーは、ほっぺを真っ赤にして言いました。

『もうレタのおかげでホームシックもなくなったわ』

『おーい、レタ。大体のことが分かったにゃあ』

そこへクラウシアが来ました。ヒューマニーワールドで得られた情報を、アイムシュタイン研究所で分析していたのです。だいたいの結果が出たようです。こころの木を通じてレタチン連邦随一の高速バイオコンピュータで解析したのです。ヒューマニーワールドのスーパーコンピュータでは、数年もかかる処理を数日間で行なってしまう。

『こうして、やっと結果が出たにゃあ』

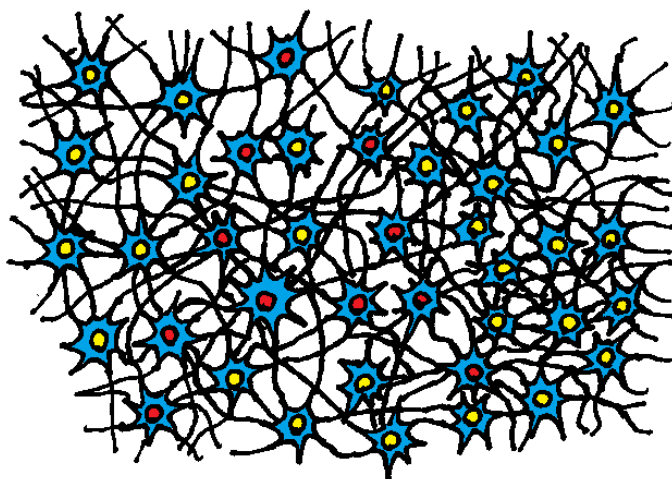
「フレンズのバイオコンピュータってそんないすごいの？」

『すごいにゃあ。すぐにわかるにゃあ』

『で、クラウシア、どうだったんだニ？』

『それはだにゃあ、ヒューマニーワールドで膨大に作られるエネルギーに、マインドエネルギーが負けているにゃあ』

『負けているニ？』



『そうだにゃあ。ヒューマンの生活ではこの強力なエネルギーが、多くの機械を動かしているにゃあ。しかしマインドエネルギーが、衰えてしまいったにゃあ』

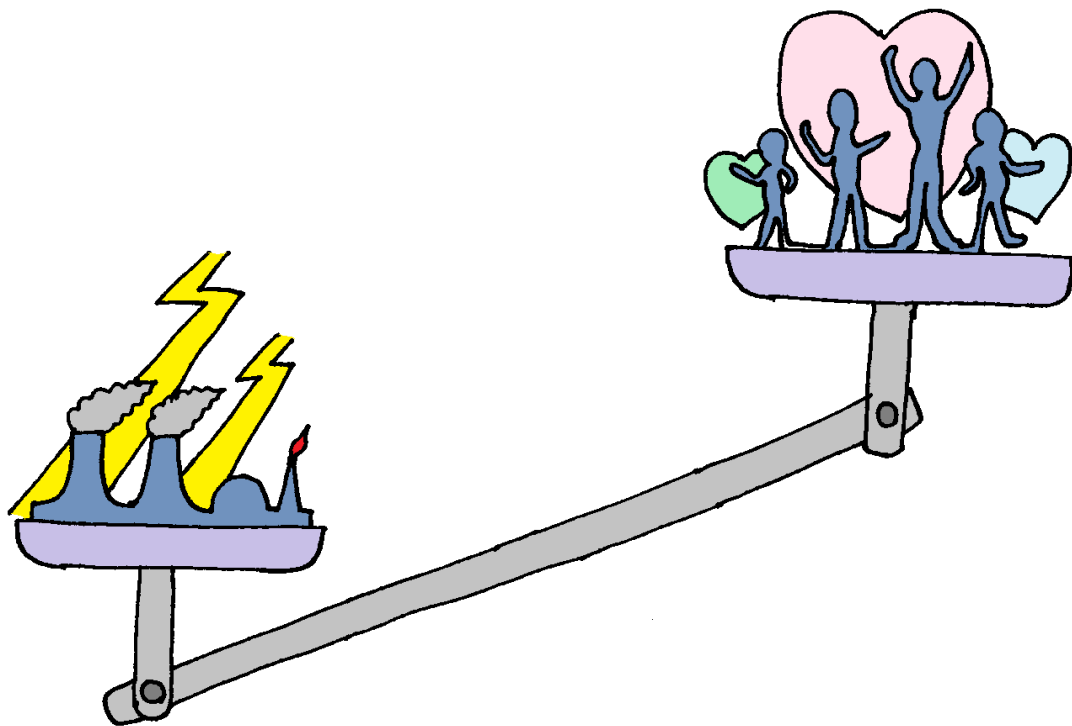
『それがトナトンにどうして影響するの？』

『マイナスのエネルギーがマイクロ次元に流入したにゃあ。それが特にトナトンに悪さしてるにゃあ』

クラウシアはみんなに大筋を説明しました。

『つまりマインドエネルギーが、マイナスのエネルギーを消せないということなのね』

『トナ、そうだよ。マイナスエネルギーがたまっているの、こっ



ちのヒューマニーワールドはこれからもっと悪くなるにゃあ』



「それで、そのマイナスのエネルギーってどんなものなの？」

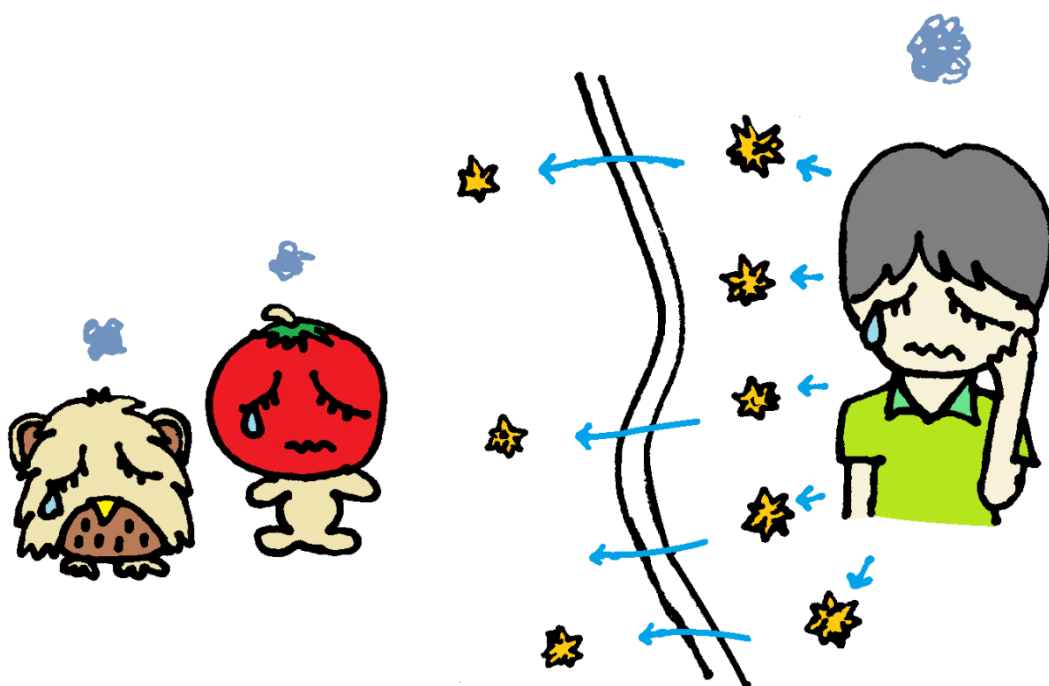
『おそろしいとげとげしいウィルスのようなもんだにゃあ』

クラウシアはさらに説明を続けました。

『トナトンの病気は、ヒューマニワールドの心の乱れによって起こるマインドエネルギーに敏感に反応してるにゃあ』

『どういうことかしら』

『抵抗力がないからこの変化に弱くなってるにゃあ』



「ヒューマンの病気も同じものなの？」

『抵抗力のない人に風邪がうつるようなもんだ二』

「どういうひとにうつるのかしら」

『それはだにゃ、イライラしたり落ち着かない者に特に影響するにゃあ。そういうヒューマンは病気になりやすいにゃあ』

『なるほど。大体の筋がみえてきた二』

「わかったの？」

『そうだニ？これでヒューマンの病気もトナトンの異変も治せるニ』

「レタさんってほんとうはすごい人なのね」

『しかしその強力なエネルギーを止めない限り、トナトンの異変は解決しないにゃあ』

クラウシアが落ち着いた言い方で発言しました。

「ヒューマンのマインドウェーブだけでは足りないのね」

レタはしばらく黙って考えていましたが口を開きました。

『我ながらいいアイデアが見つかったニ』

『トナトンを救うアイデアトナ？』

トナが言いました。

『ヒューマンのスーパーコンピューターはポンコツだからこのバイオコンピューターを売って大儲けするだニ』

「また変なアイデア……。でも儲けてるってどういうことなの？」

エイミーがレタにたずねました。

『かわりにあのトナとデコの持っている縦しまの帽子をたくさんもらうニ』

「それはトミーが手に入れてくるって……」

『ピンポン！ボクにゃんもいいアイデアが浮かんだにゃあ』

「クラウシアさんも？」

『ヒューマンはこころの木に弱いにゃあ。このこころの木を使ってヒューマンの一番偉い人に会うにゃあ。エイミー、一番偉い人って誰かにゃあ？』

「一番偉い人って言えば・・・そうね・・・この国の大統領かしら？」

『大統領ならうちにもいるわ。くじで選ばれるわ、ねっデコ』

「デコさん、それはオレンシア合衆国のことでしょ・・・」

「でもさ、クラウシア君、大統領に会ってどうするのさあ？」

『レタチンでもトナトンでもスカイブルー隊長たちが畑にスピリアンを捲くにゃあ。それはだにゃあ・・・ヒソヒソ・・・』

「ええ～～～っ、そんなことするのお～～？」

『こころの木があるからできるにゃあ』

「成功したらすごいわね」

『レタの代わりにあたしの帽子をあげるわ』

『もういいよ～～だニ！だって、オラッチはバイオコンピュータ売ってもっといい帽子を手に入れるだニ』

「・・・」

バイオコンピューター

フレンズのバイオコンピューターってどんなものなのでしょう？少しここで解説してみましよう。バイオコンピューターはバイオという言葉の通りバイオつまり生物によって作られています。スーパーコンピューターは電子によって作られています。生物の化学反応によって電気が流れるのは、スーパーコンピューターの電子も

同じです。但し速度が違います。生物の電気信号（電流＝電子の流れで作られる情報）は1秒間に10メートルほどですが、スーパーコンピューターでは光の速度の3分の1つまり10万キロメートルもの速度で情報を伝達します。

レタはそれを惑星チター随一のナメリア合衆国に、それも軍隊に売ろうというのですからこんなもので大丈夫なのでしょうか？

『だいたいスーパーコンピューターなんてオラッチのバイオコンピューターに比べれば、1週間前の冷蔵庫の野菜と今採ったばかりの野菜の差がある二』

「あんまり意味がわからないわ」

エイミーはたずねました。

『それは専門のボクにゃんが答えるにゃあ。スーパーコンピューターは数字の掛け算や割り算は得意だにゃあ。だけど畑の野菜が元気かどうかを知るの少し難しいにゃあ』

「バイオコンピューターはそれができるの？」

『得意だにゃあ。葉っぱを見て少し弱ってたら水や肥料をあげろと言うにゃあ』

『それだけじゃない二。何億年も岩や砂漠の中にも水とお日さまの光があるとまた生き返って働く二。スーパーコンピューターではさびでボロボロになってしまう二』

『それと植物性バイオコンピューターは酸素を出すにゃあ』

『動物性バイオコンピューターはもっと便利だ二』

「なにが便利なの？」

『うんちをするにゃあ』

「う、うんち・・・？」

『うんちは植物性バイオコンピューターのエネルギーになる二』

「そ、そう。そりゃあとってもすばらしいわね。うんちをするコンピューターなんてはじめて聞いたわ・・・」

『だからオラッチ、これを大統領に売ってあの帽子を手に入れるんだ二』

『レタ、ボクにゃんにも帽子を取っておいてね』



<バイオコンピューターとスーパーコンピューターの比較>

	バイオコンピューター	スーパーコンピューター
構造	生物	電子
4ケタの掛算	5分～10分時々停止	一瞬
恋の悩みを聞いた	ずっと付き合ってくれた	「計算不可能」と表示された
エネルギー源	光・二酸化炭素・水	電気
計算方法	化学変化	電子の流れ
計算方法	遺伝子と経験	データベースとプログラミング
老廃物	植物性の場合：酸素 動物性の場合：うんこ	膨大な熱

『オラッチの説明でよーくわかったかニ』

「わ、わかったような・・・あまりわからないような・・・」

『いい例があったニ。このワールドにはサッカーというゲームがあるニ。その勝ち負けを【タコ】が全部当てたニ。あれもバイオコンピューターだニ』

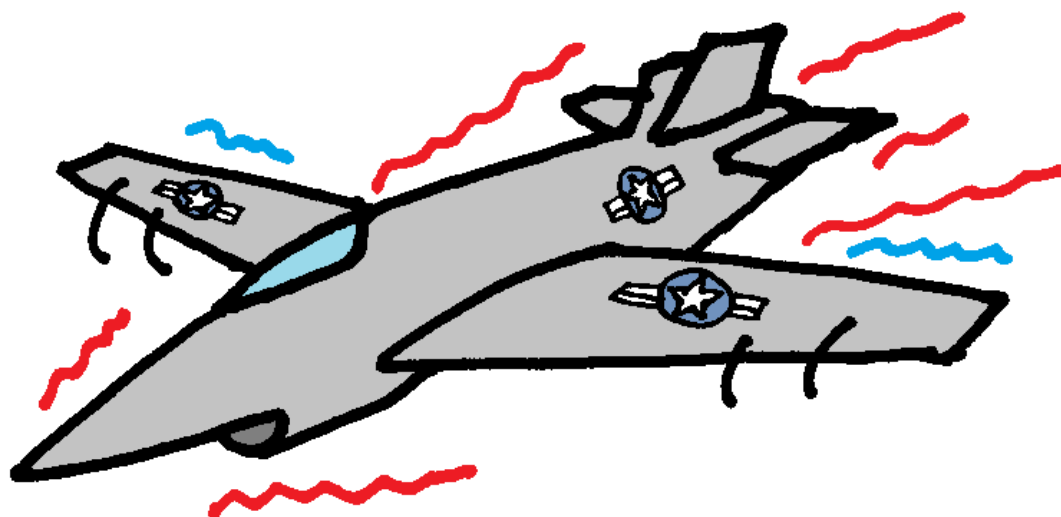
「今風に言うとスーパーコンピューターはデジタルだけど、バイオコンピューターはアナログってことかしら？」

エイミーがなんとなく整理してまとめたようです。

首都の空がおかしい

一方首都デザト・シティではジェームス・カナディ大統領が、あることに強い恐怖を感じていました。デザト・シティは以前はたんなる砂漠の小さな町でしたが、今はりっぱな大都会です。大砂漠地帯を緑化と循環生態都市のモデルとして急速に発展しました。20年前に遷都され周辺人口が500万人を越す大都会となりました。

「軍隊を出せとはいっていないが、一体全体どういうことなんだ。こんなに多くの戦闘機が墜落してるなんて」



国防長官が強い口調でいいました。

「ハッ、そのようですが」

補佐官は今にも消えそうな声でいいました。

「しかもレーダーに捕捉されないとなると、新型の攻撃兵器か？戦闘機を狂わせているのか？」

大統領も少しかすれた声で言いました。それもそのはずです。この1週間で原因不明の最新戦闘機の墜落が起こっているのです。それもレーダーには映りません。目撃者によると、戦闘機に向かって上の方から光があたったように見えたというのです。今まで1週間で3機もの戦闘機が墜落するなどありえないことだったので、大統領は何かの国際的な事件かと脅威を感じているのです。

「とにかく大統領。今度その光かなんかしらんが、それに会ったときは撃墜してもよいでしょうか？ご命令をお願いします」

国防長官が言いました。

「こうなっては仕方ないだろう。大統領命令を全軍に出す。その光に会ったときは撃墜してもよい。ただし旅客機と見間違えぬように、十分その光を注意するように伝えよ。くれぐれもトップシークレットでな」

一方首都だけでなく東海岸の大商業都市ニュー・トーク、西海岸の合衆国一の大商業都市ムーン・エンジェルズや、中央部に位置する大娯楽都市ロス・ペラスなどでも、別のおかしな現象が起こっていました。

「オレンジもトマトも実が熟したとたん、小さくしぼんでしまうんだべ」

ひとりの農夫がテレビのインタビューに答えています。あのアイムシュタイン所長が言ったのと同じような症状が野菜に出ています。

「サルや野生動物のしわざですか？」

インタビュアーは質問します。

「動物だったら食べてしまうだよ。しなびただけで実はあるんだべ」

「花が乾燥しちまったってのもあるぜ。押し花のようにな」

「いつからこのようなことが、起きているのでしょうか？」

「こんところ急だべ。4日ってとこだべさ」

実はこのような現象が、都市周辺の郊外の農園でも起こっていました。そして、あのマロン村で流行った病気も、別の都市や田舎の町や村で起こってきました。急なことなので、農家も、病院も、政府も大あわての状態です。

「ウェアー院長、軍の調査機関のため素性を明かせませんが、UFO事件について詳細をお伺いしたいのですが・・・」

そこにあのマロン村立病院で起こったUFO騒ぎを聞きつけて、ナメリア軍の関係者がやってきました。2人の関係者が院長に面会しています。

「まず状況をお話していただけますでしょうか？」

「そうですね。病気で倒れたところを丸いふわふわしたものに寝かされて運ばれたとか・・・」

「丸いふわふわしたもの・・・ですか」

別のひとりもたずねました。

「そのふわふわしたものは、何でしょうか？」

「さあ、わかりません。別の人には空中に浮いた感じだったと言っています」

「空中に浮く・・・？」

「まさにUFOだね」

軍関係者の2人はお互いの顔を見て言いました。

「他に変わったことは・・・？」

「そうですね。道に倒れていたら空から光るものが降りてきて、病院に運んでもらった、とも言っています」

「空から光るもの・・・とはまさにUFOだね・・・」

また2人はお互いの顔を見て言いました。

「他には・・・」

「宇宙人がいたとか・・・言う人もいます」

「宇宙人ですか？」

「子供くらいの大ききで、目が大きくて光っているそうです。とても怖かったと言っています」

「おそろしい宇宙人の感じでしょうか？」

「ただ1本の小さな木を渡されそれをベッドの横に置いておいたら気分が良くなったとかも言っていますね」

「1本の小さな木・・・ですか？」

いろいろと質問をした後、病院内を視察し軍関係者は帰って行きました。

マロン村立病院では

マロン村ではあの病気は少しおさまって来ましたが、村立病院の前のテントや周辺の土地に作られたそまつな建物でさえも、患者たちでいっぱいです。マロン村の小中学校も、しばらくの間臨時休校と

なりました。エイミーのクラスでも 30 人のうち既に 10 人の同級生が熱が出たりしたため、今週は 4 日間も学級閉鎖となりました。

「おいらたちは大丈夫かな？」



トミーが少し暗い表情でバーバラにいいました。

「なぜか、今のところね」

「先生のいっつけで学校新聞を持ってったんだ。うちの生徒の隣の人だけどね。ボクは鳥になって空を飛ぶんだって、おいらの顔を見ていったぜ」

トミーが病気の友人だちを見舞った事を話しました。

「ゾッとするわね。あたしも行ったわ。その子は元気はいいんだけど、起きている間中いっぱい食事をするので、おなかをこわしてしまったの。何かおかしいのよ」

病院ではウェアー院長のところに、新たな情報が届いていました。それは感染源がウィルスでなく、何か花粉のような物質のようだという事です。ウィルスを疑っていたので、ずっと大きい花粉に気がつきませんでした。それをウェアー院長が顕微鏡で見えています。

「それにしても、見たことのないもグロテスクな姿だ」

「ええ、ほんとうに嫌な形ですわ」

リアもうなずきます。リアは病院の小児科の医師で、ウェアー院長の娘です。

「リア、これをみて何を感じるかな？」

「まずこの形です。ぎざぎざして突起のようなものがあって、おそらくその突起から何かを出すのでしょうか」

「その通りだ。生物はまず形だ。おかしい形をしたものには悪者が多い。がん細胞のようにな」

ウェアー院長がいました。

「それで、その物質はまだ特定できないのですか？」

今度はリアが質問しました。

「世界中のデータベースにあたったが、似たものはなかった。全くの新種が突然変異でできたのか？しかもこのマロン村で？」

「熱やセキや湿疹もできますが、3日くらいすると治るようです。しかしその後、気力がなくなり、心の問題が残る奇妙な病気です」

リアが答えました。

「とにかく患者たちから、目を離すわけにはいかんな。他の病院からの応援も手一杯だ。とにかくがんばってくれ」

「わかっていますわ、おとうさ・・・いや、院長」

院長室を出て行く娘を見て、院長は心の中でつぶやきました。

【大人にも感染が始まっている。有効な薬が見つからないと手がうてないな】

ウェアー院長は机におかれた多くのカルテに目をやり、大きなため息をつきました。